21　「しぐれ」　─中世の擬古物語

18年度　同志社大学

★　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

　　親に隠して恋人の姫君を屋敷へ迎え入れていた中将は、親から右大臣の娘との結婚を命じられた。

　中将、親の御前をば立ち給ひて、母屋の御簾のもとにて泣き明かし給ふ。いくほどもなき世に飽かぬ別れをいかにせん、夢に夢見る心地して我が御方へ帰り給ひぬ。姫君に寄り添ひて、「まかり出でし時は何とも候はざりつるが、胸の痛く候ふよ。押さへてたび候へ」とありければ、姫君ａあさましげなる御気色にて、中将殿泣き給へば姫君も泣きむせみ給ふ。

　中将涙を押し拭ひ、のたまふやう、「生死無常の習ひ、今に始めぬことなれば、アもしこの胸大事にていかなることも候はんに、思ひや出で給ふべき」とのたまへば、姫君涙を押さへてのたまふやう、「十の年、二人の親に別れぬ。その時、乳母親子を頼みて十六になるまで育ちつれども、頼みし乳母にだにも離れぬ。今は御手に参る上はいかでか嘆かで候ふべき。親におくれし日よりして惜しからざりし黒髪を、このついでに剃り下ろし、深山、林に迷ひても御菩提をも祈り、父母も御身も我が身も、一つ蓮の身となりて、往生浄土の素懐をこそ祈り候はんずれ」とて泣き給へば、中将心の内におぼすやう、イただしのびたりとてもつひに隠れあるまじ、このこと知らせばやとおぼして、むせぶ涙を押しとどめ、「まことは胸の痛きにはあらず、親の召しつれば参りつるに、御前に召し据ゑて、『右大臣のもとへ行くべし』と仰せられければ、堪へぬ涙を押さふる袖に余れる、いかにせん」とぞのたまひける。その時、姫君、押さへ給へる胸をさし置きて、引き被きてぞ臥し給ふ。

　やうやうありて起き直り涙の底にのたまふやう、「父にも母にもおくれぬ、頼みし乳母にも離れぬ。今は一円に頼み参らせて参り候ふ上は、神にも祈り仏にも申して、世に渡らせ給ひ候はんずることこそ嬉しくは候はんずれ。右大臣殿へ入らせ給はんずることはめでたきことなれば、つゆも恨み候はず。ただ我が身こそかほど果報なき身なれば、霜雪のやうに消えも失せたく候へども、雲を分けても上り得ず、さすがに淵の底にも沈まれず、かくてこそ候はんずれ。されば『御里に不思議のものあり』とて大臣殿の御咎め候ふとも、侍従とわらはと二人をばｂさうなく追ひ出だし給ふなよ。いかならん片山里にも庵一つ結びて二人をば置かせ給へ。髪剃り下ろし墨染に身をやつし、亡き人の菩提をもとひ、また我が後世をも祈らばやと思ひ候ふ。御身は訪はせ給はずとも、居たらん所の庵を御形見と思はば、などかは慰まざるべき」と、かきくどき泣きしをれ給へば、中将殿これを聞き給ひて、御見目こそよからめ、御心ばへの優しさよ、惜しきかな惜しきかな、いくほどもなきこの世に物を思ふ悲しさよ、たちまちただ出家、遁世をもせばやとぞおぼしめしける。中将かくなん、

　　見つるより立ち離るべき方ぞなき身に添ふ影となりやしなまし

とのたまひければ、姫君泣く泣く、かくぞ、

　　別れても身に添ふ影はとまりなんいかなる山の奥に入るとも

注　一円に　　ひたすら。

　　侍従　　　姫君に仕えている女性。

問１　傍線―ａ・ｂの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

　　　　　　　　　　　１　みっともないような

　　　　　　　　　　　２　取り乱したような

ａ　あさましげなる　　３　嘆かわしいような

　　　　　　　　　　　４　思いがけないような

　　　　　　　　　　　５　いじらしいような

　　　　　　　　　　　１　あてもなく

　　　　　　　　　　　２　しかたなく

ｂ　さうなく　　　　　３　ためらいなく

　　　　　　　　　　　４　あますところなく

　　　　　　　　　　　５　ならびなく

問２　傍線　　ア・イの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

ア　もしこの胸大事にていかなることも候はんに、思ひや出で給ふべき

　１　もしこの胸の病が重篤で最悪の事態になっても、あなたは私のことを思い出して下さいますか

　２　もしこの胸の病が重くなり永遠の別れとなったら、あなたははじめて私のことを思い出すにちがいないでしょう

　３　もしこの胸の病の治癒を祈願して出家するようなことになっても、私はあなたへの思いを断ち切ることはできません

　４　もしあなたと別れて胸が引き裂かれそうになったとしても、あなたのことを一途に思っています

　５　もしこの胸の病が重くなって二度と会えなくなってしまったら、あなたは私への思いをどうぞ捨ててください

イ　ただしのびたりとてもつひに隠れあるまじ、このこと知らせばや

　１　ひたすら我慢したとしても最後には気持ちを抑えられなくなるだろう、姫君に不満を伝えよう

　２　ひたすら隠したとしても最後には露見してしまうにちがいない、姫君に内緒にしている話を打ち明けよう

　３　ひたすら人目を避けたとしてもそのうちに噂になるにちがいない、親に姫君の存在を打ち明けよう

　４　ひたすら逃げ回ったとしても最後には召し出されてしまうだろう、右大臣に親の意向を伝えよう

　５　ひたすら隠していてもそのうちに態度に出てしまうにちがいない、姫君に出家の志を伝えよう

問３　傍線- - -「見つるより立ち離るべき方ぞなき身に添ふ影となりやしなまし」の和歌の説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

１　垣間見したときから心を奪われているという中将の変わらない思いを上の句で詠み、下の句で姫君に私の影になって傍にいてくれないものかと頼んでいる。

２　恋がかなってますます姫君を失いたくないという中将の激しい思いを上の句で詠み、下の句で愛情が強すぎて影のようにやつれてしまったと訴えている。

３　逢瀬を重ねたからには添い遂げたいという中将の切実な思いを上の句で詠み、下の句で自分に死が影のように忍び寄ってきていることを嘆いている。

４　逢い続けるよりもいっそ別れた方がよいという中将のやるせない思いを上の句で詠み、下の句で姫君を影のように見守っていくと誓っている。

５　初めて逢ったときから別れがたいという中将の強い思いを上の句で詠み、下の句でいっそ影になって姫君と一緒にいられないものかと願っている。

問４　傍線＝「給ひ候はんずる」の文法的説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

１　尊敬の補助動詞「給ふ」＋尊敬の動詞「候ふ」＋推量の助動詞「んず」＋完了の助動詞「り」

２　謙譲の動詞「給ふ」＋尊敬の動詞「候ふ」＋推量の助動詞「んず」

３　謙譲の補助動詞「給ふ」＋丁寧の補助動詞「候ふ」＋意志の助動詞「んず」＋尊敬の助動詞「る」

４　尊敬の補助動詞「給ふ」＋丁寧の補助動詞「候ふ」＋推量の助動詞「んず」

５　尊敬の動詞「給ふ」＋丁寧の補助動詞「候ふ」＋意志の助動詞「んず」

問５　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

１　中将は姫君と一緒に泣いた後、姫君の涙もふいてあげた。

２　姫君は、十歳の時に両親と生き別れになったばかりか、乳母とも別れてしまった。

３　姫君は、中将の胸を押さえるのをやめて、衣をかぶって泣き伏した。

４　姫君は、自分の身の上を不幸とは思っていない。

５　姫君は、死んでしまいたいと思いつつもこうして生きながらえているということを中将に話した。

６　中将は、姫君のために庵を一つ山里に作ろうとしている。

◎問６　傍線―「御心ばへの優しさよ」について、中将は、どのようなことを「優し」と思ったのか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

［

］

【解答】

問１　ａ＝４　ｂ＝３

問２　ア＝１　イ＝２

問３　５

問４　４

問５　３・５

問６　Ａ恨むこともなく、Ｂ自身の幸せより中将の幸福を望むＣけなげさ。（28字）

評価の基準　Ａ＝４

　　　　　　Ｂ＝３〔「中将のために身を退く」など、自分より中将を優先するという内容なら可。〕

　　　　　　Ｃ＝３〔「奥ゆかしさ」「つつましさ」なども可。〕

【現代語訳】

　中将は、親の御前をお立ち（去り）になって、母屋の御簾の所で泣き明かしなさる。取るに足りない世に不本意な別れを（しなければならないことを）どうしようか（と）、夢の中で夢を見る気がして自分のお屋敷へお帰りになった。姫君に寄り添って、「（家から）退出したときはなんともなかったのですが、胸が痛むことですよ。押さえてくださいませ」と言ったので、姫君は思いがけない（という）ご様子で、中将殿がお泣きになると姫君も声を詰まらせてお泣きになる。

　中将は涙を押しぬぐって、おっしゃるには、「人の生き死にが無常であるという定めは、今に始まったことではないので、もしこの胸の病が重篤で最悪の事態になっても、（あなたは私のことを）思い出して下さいますか」とおっしゃると、姫君が涙を押さえておっしゃるには、「（私は）十歳の年（に）、二人の親と別れてしまった。そのとき、乳母親子を頼りにして十六になるまで育ったけれど、頼りにしていた乳母にまで別れてしまった。今は（あなた様の）御手元に参った以上は（あなたが死ぬようなときには）どうして嘆かずにいられましょうか（いや、嘆かないわけがありません）。親に先立たれた日以来惜しくなかった黒髪を、これを機に剃り下ろし、深山（や）、林（の中）に迷ってでも（あなた様の）御成仏をも祈り、父母もあなた様も自分の身も、（極楽で）、同じ一本の蓮の（上に生まれる）身となって、極楽浄土（に生まれ変わりたいと）のかねてからの願いを祈ろうと思います」と言ってお泣きになるので、中将が心の中でお思いになるには、ひたすら隠したとしても最後には露見してしまうにちがいない、姫君に内緒にしている話を打ち明けようとお思いになって、むせび泣く涙を押しとどめ、「本当は胸が痛いのではない、親が（私を）お呼び寄せになったので参上したところ、御前にお呼び寄せになって、『右大臣のもとへ（婿に）行きなさい』とおっしゃったので、こらえきれない涙が押さえる袖に溢れるのを、どうしようか」とおっしゃった。その時、姫君は、お押さえになっていた（少将の）胸から手を離し置いて、（衣を）引きかぶって（泣き）臥しなさった。

　しばらくして（姫君は）起き直り涙の底に（沈むようにして）おっしゃるには、「（私は）父にも母にも先立たれた、頼りにしていた乳母にも別れてしまった。今はひたすら（あなた様を）頼り申し上げて（この邸に）参りました以上は、神にも祈り仏にも申し上げて、（あなた様が）世の中をお渡りになっていこうとなさいますことこそ嬉しいことと考えようと思います。右大臣殿へお入りになろうとなさることはお祝いすべき事であるので、少しも恨みません。ただ我が身はこれほどまでに運のない身なので、霜や雪のように消え失せたく思いますが、雲を分けて（天に）上ることもできず、そうはいっても淵の底にも沈むこともできず、このようにして生きていようとしております。だから『ご実家に不審な者がいる』と言って大臣殿のおとがめがありましても、侍従と私と二人をためらいなく追い出しなさらないでくださいね。どのような片田舎にでも庵を一つ構えて（私と侍従の）二人をお置きください。髪を剃り下ろし（出家して）墨染め（の衣）に身を変えて、亡き人の極楽往生をも気遣い、また我が後世をも祈りたいと思います。あなた様はお訪ねにならなくても、（私たちが）過ごしているであろう所の庵を（あなた様の）御形見と思うならば、どうして慰めとならないことがあるだろう（いや、慰めになる）」と、繰り返して泣きに泣いてぐったりなさるので、中将殿はこれをお聞きになって、（姫君の）ご容貌も美しいのに、気立てのけなげな事よ、残念だ残念だ、なにほどもないこの世にものを思い悩む悲しさよ、今すぐにただ出家、遁世をもしたいとお思いになった。（そこで）中将はこのように（歌を詠んだ）、  
　　　あなたに会って以来あなたのもとを離れることができない。いっそ私は

　　あなたの身に寄り添う影となってしまおうか。

とおっしゃったので、姫君は泣く泣く、このように（詠んだ）、　　  
　　　私たちが別れても私の身に添う影はきっと離れないでしょう。私がどの

　　ような山の奥に入っても。